

学術雑誌におけるカタカナの役割と使用実態(その2)

—「慣用カタカナ表記」発掘調査 結果報告—

Role of Katakana in Academic Journals and Actual Status of Katakana Use (No. 2):
Results of an Investigation on Unearthing 'Conventional Katakana Notations'

増地 ひとみ

MASUJI Hitomi

キーワード：非外来語のカタカナ表記、慣用化、学術雑誌

1. 本稿の目的

筆者は先に増地（2018a）において、学術雑誌におけるカタカナの使用状況を調査した。本稿はその続編である。増地（2018a）では、抽出されたカタカナ表記を現代日本語におけるカタカナの役割に沿って整理し、コンテキスト¹⁾に関わりなくカタカナで表記される非外来語を「慣用カタカナ表記」として認定することを提案した。【カタカナ】【ケガ】²⁾等である。学術雑誌で使用されるこれらの非外来語のカタカナ表記は、例えば【ナゾ】【ギモン】等とは異なり、改まった場でもカジュアルな場でも使用可能と考えることができる。つまり、コンテキストに関係なくカタカナで書くことができるということであり、カタカナで表記しても「特別な意味を持たせようとしている」等の印象を受け手に与える可能性が低いということである。

本稿では、「慣用カタカナ表記」と認定しうる用例をさらに発掘するために行った調査の結果を報告し、学術雑誌に出現する慣用カタカナ表記の特徴を考察する。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

現代日本語の文字言語では、外来語以外（非外来語）がカタカナで表記される例が多数観察される。それらの中には、カタカナ表記が慣用化したと見なしうるものも含まれる。しかし、慣用化を認定する方法が考案されてこなかった。そこで、〈カタカナ表記が慣用化しているのか否か〉を判定するための方法として、〈その語がカタカナで表記されるにあたって、コンテキストの影響を受けるかどうか〉を基準とすることを提案したのが増地（2018a）である。ここでのコンテキストは、改まった文章かカジュアルな文章かといった、改まりの度合いである。

例えば、冒頭で例示した【ナゾ】や【ギモン】は改まった文章では出現しにくいいため、文字種が選択されるにあたりコンテキストの影響を受ける語である。一方で、改まった文章でも出現する非外来語のカタカナ表記も存在する。コンテキストの影響を受けない、つまり改まった場面でもカジュアルな場面でも出現する（＝使用可能な）カタカナ表記である。言い換えれば、「改まった文章だから使用を控える」という意識が表記者に生じにくいカタカナ表記である。「改

まった文章においてはああるが、この語はカタカナで表記しても差し支えないだろう」と、表記者が意識的にか無意識的にか判定する語と表記である。これらは場面の改まり度に関係なく出現し、使用可能ということであるから、慣用化していると見なして差し支えないであろうと考えた。

今述べたことは、増地（2018a）で学術雑誌を対象とした調査を行った結果、導き出された結論である。現代において日々産出されている文字資料の中でも、学術雑誌はとりわけ改まり度が高い。その学術雑誌で出現する非外来語のカタカナ表記であれば、どのような改まり度の資料においても出現する可能性がある。よって、コンテキストの影響を受けずにカタカナで表記される語であると判定でき、「慣用カタカナ表記」と認定できるであろうと考えたわけである。

増地（2018a）における調査は、早稲田大学の複数の研究科およびその関連組織が発行する学術雑誌を対象として行った。143本の文献から、カタカナで表記された語（以下「カタカナ表記語」）はのべ10,219件抽出され、そのうち異なりで17件を慣用カタカナ表記として認定することを提案した。本稿では、同じ調査を愛知淑徳大学の複数の学部・研究科および関連組織が発行する学術雑誌を対象として行い、その結果を報告する。結論から述べると、増地（2018a）の調査結果と重複する用例が多く、新たに追加された慣用カタカナ表記と見なしうる用例は4件であった。以下では、増地（2018a）の要点を述べた後、今回新たに実施した調査の結果を報告する。

3. 増地（2018a）における調査と結果の概要

本稿では、増地（2018a）と同じ枠組みにて語を分類・集計していく。そこで、のちの検討のため、現段階で共有しておくべき情報を本章で提示する。

3.1 現代日本語におけるカタカナの役割

増地（2018a）ではまず、現代日本語における一般的な「カタカナの役割」を10通りに整理した³⁾。マスメディアや教科書関連の出版社が発行している「表記の手引き」類を任意に4つ選定し、カタカナの使い方を記述した箇所から、共通する項目を抽出・整理したものである⁴⁾。

3種類以上の手引きに共通するカタカナの用法は「A. カタカナの規範的な役割」、1～2種類の手引きに共通するものは「B. カタカナの準規範的な役割」とした。具体的には以下のとおりである。本稿でも、この10通りを「カタカナの役割」として、抽出した用例の分類を行う。

A. カタカナの規範的な役割

- ①外来語、外国語（外国人名、外国の地名を含む）⁵⁾
- ②擬音語、擬声語、擬態語（以下「オノマトペ」と総称） ③動植物名⁶⁾

B. カタカナの準規範的な役割

- ④俗語⁷⁾ ⑤専門的な用語 ⑥助数詞
⑦記号としての用法（表音機能に基づくものなど）⁸⁾
⑧日本語の固有名詞⁹⁾ ⑨能・狂言の用語 ⑩化学物質名

3.2 増地（2018a）で抽出されたカタカナ表記語と、それらにおけるカタカナの役割

増地（2018a）では、予備調査を行った上で本調査を行った。予備調査の対象は、先に述べたとおり、早稲田大学の複数の研究科および関連組織が発行する学術雑誌から選定した文献である。予備調査の結果を踏まえて、『国文学研究』（早稲田大学国文学会）を本調査の対象とした。

予備調査と本調査を行った文献は、計143本である。そこからのべ10,219件のカタカナ表記が抽出された。それらを3.1で示した10通りに分類した結果が、表1である。

『国文学研究』は文学・日本語学領域の論文等を収録する学術雑誌である。そのため、⑤⑦⑧の用法が非常に多く見られる点で、他の分野の文献とはカタカナ表記語の出現傾向が著しく異なっていた。しかしその点も含め、この『国文学研究』におけるカタカナの用法は学術雑誌全般におけるカタカナの用法をカバーしていると思われ、これを本調査の対象とした。

表1のCの欄に示した48件が、3.1で設定した「カタカナの役割」を外れる表記、すなわち「役割外のカタカナ表記」である。ここから、『国文学研究』の書評で使用されていた10例を除外した。書評においては、文字種を選択する際の著者（表記者）の意識が、その他の論文等の場合とは異なると考えられたためである。結果、増地（2018a）で調査した学術雑誌に出現した役割外のカタカナ表記（C）は以下の16種類、のべ38件となった。丸かっこ内の数字は、のべの出現数を示す。

カギ（1）、カタカナ（1）、カラオケ（3）、クチコミ（4）、ケガ（2）、ズレ（7）、セリフ（2）、
ダメ（1）、ツケ（1）、ハガキ（1）、パネ（1）、バラつき（3）、ヒト（3）、マンガ（1）、
メガネ（1）、モノ（6）

ここに、資源や財産を表す場合の【ヒト、モノ、カネ】のうち上記に含まれていない【カネ】も加え、計17種類とした。これらを慣用化したと思われ、「慣用カタカナ表記」という術語で呼ぶことを提案した。

【表1】 増地（2018a）の調査におけるカタカナ表記語出現数

学術雑誌を発行する研究科 (予備調査のみに使用)	文献数	A. 規範的			B. 準規範的						C	合計		
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			⑩	
ア 政治学	3	313												313
イ 法学	4	206						2				1		209
ウ 文学	4	403	5										9	417
エ 教育学	5	714		2	1		4	8				4		733
オ 商学	4	743					1		1				5	750
カ 国際情報通信(理工学術院)	3	938	2					15				6		961
キ 社会科学	4	582		1			39					2		624
ク 人間科学	3	206												206
ケ スポーツ科学	2	451		4		3								458
コ 国際コミュニケーション	2	561						1						562
サ アジア太平洋	2	381					3							384
シ 日本語教育	4	936	1				2		2			1		942
小計	40	6,434	8	7	1	3	49	26	3	0	0	28		6,559
A・B・Cごと計		6,449					82					28		
		98.3%					1.3%					0.4%		
本調査			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
国文学研究	103	2,261	4			204	3	748	390	30			20	3,660
A・B・Cごと計		2,265						1,375					20	
		61.9%						37.6%					0.5%	
合計(予備調査+本調査)	143		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
		8,695	12	7	1	207	52	774	393	30	0	48		10,219
A・B・Cごと合計		8,714						1,457					48	
		85.3%						14.3%					0.5%	

※見やすさを考慮し、合計欄以外の「0」は表示していない。

※この表1は、増地(2018a)の表3と表4を統合して作成し直したものである。

4. 調査の対象と方法

ここからは、今回新たに実施した調査に関して述べる。調査の対象と方法は以下のとおりである。調査対象範囲と調査方法は、増地（2018a）のものを踏襲している。

- ・対象誌：愛知淑徳大学の学部・研究科および関連組織が発行する学術雑誌。2018年・2019年発行のものを中心に収集した。雑誌名を本稿末尾に掲げた。
- ・文献数：50本。各雑誌から1～3本の間で選定した¹⁰⁾。タイトルを参考に、テーマが多様になるよう考慮した。
- ・調査対象範囲：各文献のタイトル、本文（地の文¹¹⁾、見出し）、執筆者作成の例文。他の文献からの直接引用部分、表および図の中の文字は調査対象外である。
- ・調査方法：調査対象範囲からカタカナ表記語を目視で抽出し、品詞・出現頻度と共にExcelに入力した。カタカナ表記語には、語形を表す用法など「語」とは言えないものも含む。雑誌の情報（第何号か）、文献の種類（論文・その他の別）、テーマ、著者名、研究分野も合わせて入力した。
- ・「非外来語のカタカナ表記」の定義に関して：非外来語のカタカナ表記を一部に含む複合語も、「非外来語のカタカナ表記」として扱う。【クチコミ】【カラオケ】などである。

5. 調査結果と慣用カタカナ表記認定のための検討

5.1 調査結果

調査対象とした雑誌を発行する学部・研究科および関連組織ごとに、出現したカタカナ表記語数を集計して表2に示す。

【表2】 カタカナ表記語 出現数（愛知淑徳大学の学部・研究科等）

学部・研究科等	文献数	A. 規範的			B. 準規範的						C	合計	
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			⑩
文学部	6	870		2		2	127	9				1	1,011
人間情報学部	4	458							1			1	460
心理学部	4	418		3			1					2	424
創造表現学部	2	695	6			24	8	1	4			23	761
健康医療科学部	5	456				1	2		2			3	464
福祉貢献学部	7	911	1	1			1	15	1			7	937
交流文化学部	4	594					4		4			2	604
ビジネス学部・ビジネス研究科	5	1,267							2			5	1,274
グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科	3	407		2					4			1	414
グローバルコミュニケーション学部	2	261					2						263
教育学研究科	4	243	1	28			3	7				5	287
初年次教育部門	4	261											261
合計	50	6,841	8	36	0	27	21	150	27	0	0	50	7,160
A・B・Cごと合計		6,885						225				50	
		96.2%						3.1%				0.7%	

※見やすさを考慮し、合計欄以外の「0」は表示していない。

用例が見られた①～③、⑤～⑧に該当する例の一部を示す。

- ① 外来語、外国語： ストーリー、キリスト、ポーランド、ステイブ・ジョブス 等
- ② オノマトペ： トントン、ゴツゴツ、バラバラ、キョロキョロ 等
- ③ 動植物名： ネズミ、タマネギ、クスギ、イチゴ、ヒト¹²⁾ 等
- ⑤ 専門的な用語： サ変、アミ点亜鉛凸版、ベキ乗式、ベタ組み、ツメ組み 等
- ⑥ 助数詞： 3ヵ月、2ヵ所、ニコマ、三ヵ国語 等
- ⑦ 記号としての用法： ア・イ・ウ…（羅列して示す際の数字の代用）、クレル（語形を示す）等
- ⑧ 日本語の固有名詞： モリサワ、トヨタ、カナモジカイ 等

C、すなわち役割外のカタカナ表記は、今回はのべ50件が抽出された。表3に示すとおりである¹³⁾。カタカナの文字列の前あるいは後ろにカッコが接している用例が一定数見られた。その場合は、カッコも含め、囲まれた部分をすべて示す。

増地（2018a）ですでに抽出済みのものは1番から12番で、異なりで8種類見られた。1～12番に関しては、学術的な文章という改まり度の高いコンテキストにおいても使用されるカタカナ表記であることが、改めて確認された。

【表3】 役割外のカタカナ表記

◆増地(2018a)ですでに抽出済みのもの

	品詞	用例	出現数	学部・研究科	研究分野、テーマ等
1	名詞	カギ	1	文学部	教科教育学
2	名詞	カタカナ	1	人間情報学部	心理学
3	名詞	カタカナ	17	創造表現学部	学際情報学
4	名詞	カラオケ	5	教育学研究科	教育心理学
5	名詞	クチコミ	1	ビジネス学部	マスメディア広告
6	名詞	ズレ	3	健康医療科学部	視覚科学
7	名詞	「ズレ」	4	福祉貢献学部	子ども福祉
8	名詞	バネ	1	創造表現学部	教科教育学
9	名詞	バネ	1	創造表現学部	学際情報学
10	名詞	バラつき	1	創造表現学部	学際情報学
11	名詞	モノ	1	創造表現学部	教科教育学
12	名詞	モノ	1	ビジネス学部	マスメディア広告
		出現数 計	37		

◆今回の調査で新たに抽出されたもの

	品詞	用例	出現数	学部・研究科	研究分野、テーマ等
13	名詞	「イマドキの若者」	1	交流文化学部	キャリア教育
14	名詞	「ホンモノとの出会い」	1	交流文化学部	キャリア教育
15	名詞	「タンス預金」	3	ビジネス学部	税務
16	動詞	(重複アリ)	1	福祉貢献学部	子ども福祉
17	名詞	(タテ関係)	1	心理学部	心理学
18	名詞	(ヨコ関係)	1	心理学部	心理学
19	名詞	タンポ	1	福祉貢献学部	子ども学、保育学
20	名詞	ピラ	1	福祉貢献学部	社会福祉
21	名詞	チラシ	2	創造表現学部	学際情報学
22	名詞	レンガ	1	グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科	観光文化
		出現数 計	13		

5.2 慣用カタカナ表記認定のための検討

今回の調査で新たに抽出された用例のうち、13・14・15番に関してはカギかっこ「」でくくられていた。いずれも文の途中で出現したものである。このようなカギかっこの用法は、引用、または、中の文字列を強調する等の表記主体の何らかの意図によるものと一般的には解釈される。中の語がカタカナで表記されているのも、その語のカタカナ表記が慣用化しているためというよりも、表記主体の意図を反映したものと考えるのが妥当であろう。

ここで13・14番が出現した文献を確認すると、外国人青少年に対するキャリア教育のあり方を論じる内容であった¹⁴⁾。研究対象が外国人であるという背景が、このカタカナ表記の出現を促進したとも考えられる。そして13・14番ともに一度ずつの使用であることから、これらのカタカナ表記は、カギかっこの使用とも相まってキャッチコピーのような役割を担うことが表記主体によって意図されたものであると推測する。実際、14番の【ホンモノ】は、筆者がこれまでに調査した文字資料のうち、テレビのバラエティ番組のテロップ、テレビCM、交通広告のキャッチコピーで観察されたカタカナ表記である(増地2018b, p.263)。【イマドキ】も、バラエティ番組で使用されていた(同, p.249)¹⁵⁾。

15番の【「タンス預金」】は、「銀行預金をやめて「タンス預金」を勧める者すらもいる」¹⁶⁾と

いう文脈で使用されていた。「銀行預金」と対になる概念としての「タンス預金」を強調するという表記主体の意図によるものであろう。【たんす】をひらがなで表記すると、前接の語からひらがなが続くことになり、読みにくい。そこでカタカナで表記したのち、さらに「タンス預金」がひとまとまりの語であることを示すためにカギかっこでくくった結果の産物とも考えられる。

そして、16番【(重複アリ)】の【アリ】は今回抽出された用例中唯一の動詞で、以下の文脈で使用されていた。

7つのグループがそれぞれ自分たちの考えたテーマ（重複アリ）で「身近な自然マップ」、
「交通安全マップ」、「町の標識やお店屋マップ」（後略）¹⁷⁾

また、17・18番は「親（タテ関係）から、友達（ヨコ関係）への移行期」¹⁸⁾という用法であった。17番と18番の【(タテ関係)】【(ヨコ関係)】はセットで使用されており、人間関係を対比させながら表示するための、記号に準じた用法とも言えそうである。13～16番に関しても、いずれもカギかっこや丸かっこと共に使用されていることから、⑦の「記号としての用法」という面を含むものと考えられる。カギかっこや丸かっこ等でくくられて出現したこれらのカタカナ表記は、慣用化しているというよりも、臨時的な用法と見るのが妥当であろう。これらについては、7番の「ズレ」のようにかっこを伴わない例がすでに観察されている場合を除き、かっこを伴わずに出現する例とは区別して捉えることにしたい。

本稿の目的に対応する結論として、19～22番の4種類を慣用カタカナ表記と見なしうるカタカナの用例として追加したい。【タンポ】【ビラ】【チラシ】【レンガ】である。なお、この用例の【タンポ】は、「担保」ではなく拓本を作る時に使う道具の「たんぽ」である。

6. 学術雑誌に出現する慣用カタカナ表記の特徴

最後に、増地（2018a）と本稿の調査結果を踏まえ、現時点で抽出できている21種類の慣用カタカナ表記の分類を試み、特徴を考察する。21種類をまずは五十音順に列挙すると以下のとおりである。【カギ】は物理的な錠前の鍵ではなく、「問題解決のカギ」等の文脈で用いられたものである。

カギ、カタカナ、カネ、カラオケ、クチコミ、ケガ、ズレ、セリフ、ダメ、タンポ、
チラシ、ツケ、ハガキ、バネ、バラつき、ヒト、ビラ、マンガ、メガネ、モノ、レンガ

これらのうち「カネ」「ヒト」「モノ」は、増地（2018a）でも述べた「資源や財産を表す場合」の【ヒト、モノ、カネ】を構成する要素として独立して捉える。そして【カラオケ】と【クチコミ】はいずれも、外来語の縮約形を後部要素に持つ複合語であるというのがその特徴である。

その他の語について、増地（2019）で一覧にした、非外来語がカタカナで表記される要因に照らして検討することとする。【ヒト】【モノ】【カネ】【カラオケ】【クチコミ】を除いた16語を表4に示す。

【表4】 学術雑誌から収集した慣用カタカナ表記の特徴（●はその語と表記が該当する項目）

	カギ	ツケ	チラシ	パネ	ピラ	レンガ	ケガ	ズレ	セリフ	バラつき	ハガキ	マンガ	メガネ	カタカナ	ダメ	タンポ
1 漢字で書きにくい事情にある	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●						●
2 仮名表記にした場合にまぎれる同音語がない			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
3 名詞(一般)または副詞である	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
4 漢字の第一義ではない意味で用いられている	●	●														
5 人間生活において使用する物品名			●	●	●	●					●	●	●			●
	I		II				III				IV			V	VI	

これらの語の多くに当てはまる要因を増地（2019）で示した一覧に即して見ていくと、まず、何らかの「漢字で書きにくい事情にある」という特徴が認められる（表4の1番）。漢字で書きにくい事情とは、表外字・表外音訓であること、漢字表記がないこと、漢字表記になじみがないこと等である。また、2010年11月までは表外字・表外音訓であったこと（【鍵】が該当）、漢字を用いると漢字とひらがなの混合表記になること（【散らし】【付け】が該当）もここに含める。

そして2番の「仮名表記にした場合にまぎれる同音語がない」という特徴は、土屋信一（1977）で指摘されていた、非外来語がカタカナで表記される要因である。土屋（1977）では【デンワ】【タタミ】【タイコ】【マンガ】などが該当する例として示され、これらの語は「仮名表記ではあってもまぎれるような同音語がなく、語義を理解するために特に漢字を必要とせず、また、一連続の片仮名としての語の識別性にもすぐれる」と述べられている（p.149）。表4の2番に●印が付いた語群は、まさにその特徴を持っている。

3番は、増地（2019）で述べた特徴である（p.154）。品詞の中では、名詞（一般）と副詞において非外来語のカタカナ表記が出現しやすい。

4番はこれまで中山恵利子（1998）、堀尾香代子・則松智子（2005）、柏野和佳子・奥村学（2012）、柏野和佳子（2014）で指摘されてきた要因である。辞書で調べた場合に第一義として掲載されている意味以外で語を用いる場合に採用されるカタカナ表記である。ほかには、【コツ】（「要領」等の意味、漢字表記は【骨】）、【クビ】（「会社等を辞めさせられる」の意味、漢字表記は【首】）などが該当する例である。

表4の語群にはさらに、「日常的で使用頻度が高い語」または「人間生活において使用する物品名」とあるという共通点もある。後者の「物品名」の場合は、5番に●印を付した。「物品」は、ここでは「抽象的な概念ではなく、形のある物」という意味とする。

以上を踏まえると、表4の語群は次のI～VIの6通りに分類できそうである。表4の下方に

示したとおりである。

- ・「漢字の第一義ではない意味で用いられている」場合。加えて、条件として「漢字で書きにくい事情にある」と「名詞（一般）または副詞である」ことを満たすもの。⇒ I
- ・「仮名表記にした場合にまぎれる同音語がない」、「名詞（一般）または副詞である」。かつ、「漢字で書きにくい事情にある」、「人間生活において使用する物品名」であるもの。⇒ II
- ・IIの条件のうち、「人間生活において使用する物品名」以外を満たすもの。⇒ III
- ・IIの条件のうち、「漢字で書きにくい事情にある」以外を満たすもの。⇒ IV
- ・【カタカナ】⇒ V
- ・その他 ⇒ VI

先に述べた〈外来語の縮約形を後部要素に持つ複合語〉に加え、これらのI～VIが学術雑誌で観察された慣用カタカナ表記の特徴ということになる。

【カタカナ】（V）は、ほかの語にはない独自の特徴を持つため独立させた。すなわち、「表記と語の指し示す意味とが一致しており、一見してカタカナだとわかる視覚効果」を持つのが【カタカナ】という表記である（増地 2020、p.154）。

その他（VI）については、さらに学術雑誌における用例を収集することで、特徴が見いだせるかもしれない。【タンポ】はIIに分類するという考え方もあるであろうが、筆者の内省では、／たんぽ／という音からまず発想されるのは【担保】である。つまり、仮名表記にした場合にまぎれる同音語が存在する。また、II・III・IVの語群に比べると〈日常的で使用頻度が高い語〉とは言えないと思われたため、IIには含めずVIとした。

上記の特徴を踏まえれば、学術雑誌にも出現しうるカタカナ表記、すなわち「慣用化している」と見なしうるカタカナ表記」をある程度推測することができる。筆者がこれまでに収集した用例が増地（2018b）の巻末に一覧として掲示しており、その中からI・II・III・IVのいずれかの条件を満たし、かつ日常的で使用頻度が高い語を抽出すると、例えば次のようである。

- Iに該当：キモ、コシ、タレ、ツボ 等
- IIに該当：カバン、ザル、ハサミ、ヘラ 等
- IIIに該当：カビ、ケンカ、コク、ヤケド 等
- IVに該当：サイフ、タマゴ、ハミガキ 等

このような〈I・II・III・IVのいずれかの条件を満たし、かつ日常的で使用頻度が高い語〉は、学術雑誌という改まり度の高いコンテキストの文章においてもカタカナ表記で出現すると見ることができそうである。すなわち、慣用化している「慣用カタカナ表記」と認定しうるものであると言えるであろう。

7. おわりに

本稿では、増地（2018a）の続編として学術雑誌におけるカタカナの使用状況を調査し、「慣用カタカナ表記」と認定しうる用例のさらなる発掘を試みた。そして増地（2018a）と本稿とで見いだした用例を統合し、学術雑誌に出現する慣用カタカナ表記の特徴を考察した。

本稿の調査によって発見できた用例はごくわずかであり、しかもその4分の3はすでに増地（2018a）で発掘済みのものであった。しかし、重複している用例については慣用化の裏づけとなった。また、4種類という少数ではあったが、慣用カタカナ表記として認定しうるカタカナ表記を新たに追加することができた。これらは、コンテキストに関わりなくカタカナで表記される非外来語であるということになる。

本稿では最後に、学術雑誌に出現する慣用カタカナ表記の特徴を考察した。そしてそれを基に、学術雑誌に出現しうるカタカナ表記、すなわち「慣用化していると見なしうるカタカナ表記」を推測して一部の例を挙げた。今後も調査を継続し、この推測が妥当であったのかどうかの検証を行うとともに、慣用カタカナ表記と認定しうるカタカナの用例をさらに見いだしたい。

注

- 1) 「コンテキスト」は、増地（2018a）同様「コミュニケーションが成立する場面、状況」と定義する。
- 2) 本稿における【 】は、【 】内の文字種を使用して表記されていることを示す。
- 3) 詳しくは、増地（2018a）pp.2-3を参照。
- 4) 使用した手引き類は、『NHK 漢字表記辞典』（NHK 放送文化研究所 2011）、『朝日新聞の用語の手引』（朝日新聞社用語幹事編 2010）、『表記の手引き 第六版』（松村明校閲・教育出版編集局編 2011）、『記者ハンドブック 第12版』（共同通信社編著 2010）である。2010年・2011年発行のものに揃えた。増地（2018a）の調査・執筆時以降、教育出版の『表記の手引き』は第七版が2017年に、共同通信社の『記者ハンドブック』は第13版が2016年に発行された。また、『朝日新聞の用語の手引』は2015年・2019年発行版も存在する。いずれにおいても、カタカナの用法に増地（2018a）で使用した旧版からの変更はない。
- 5) 手引きによっては、中国・朝鮮は除く旨の但し書きがある。本稿では、中国・朝鮮なども含め、外国の国名・地域名・地名（「地名」と総称する）がカタカナで表記されているものはカタカナの役割に合致していると見なす。
- 6) 手引きにより、「学術的名称・外来種・強調する場合」「漢字表の範囲内で書けない動植物名」「学術的名称としての動植物名」という限定条件が設けられている。本稿ではこのような限定条件は設けない。
- 7) 『NHK 漢字表記辞典』NHK 放送文化研究所（2011）では例として「インチキ、ダフ屋、ノミ行為」が挙げられている。
- 8) 松村明校閲・教育出版編集局編（2011）『表記の手引き 第六版』に示された「発音を示す

表記「漢字の音読みを訓読みと区別して示す表記」「用語の活用の名称や、音楽の調の名称の表記」「図形上の点や、項目の細別の順序の表記」「電報文の表記」を⑦にまとめた。ルビもここに含むこととする。

- 9) 松村明校閲・教育出版編集局編（2011）『表記の手引き 第六版』では、例として「サロマ湖」や文学作品中の登場人物の名前が挙げられている。増地（2018a）では⑧を「日本語の固有名詞のうち、特殊なもの」としていたが、実際は特殊かどうかを問わず固有名詞を⑧に分類・集計していた。固有名詞が特殊かどうかの判断は難しい場合もある。本稿では⑧を「日本語の固有名詞」という表現に改め、特殊であるか否かにかかわらず、すべての固有名詞を⑧に分類する。実在する人物名、会社名など、いわゆる固有名詞全般が該当する。
- 10) 1冊に収録されている論文数は最少3本、最多11本であり、バラつきがある。そのため学部・研究科ごとの調査対象文献数にも差が生じている。
- 11) 本稿における「地の文」は、他の文献からの直接引用部分以外を指す。
- 12) 「生物中の一類としての人間」（『日本国語大辞典』第二版「ひと」の項）の意味の場合。
- 13) 「研究分野、テーマ等」は、専門外の筆者が内容から判断したものであり、各分野における正確な区分等を反映しているわけではない。論文の大きな内容を示すために記載した。
- 14) 出典：小島祥美（2019）「学齢を超過した外国人青少年に対するキャリア教育の在り方—大学生とのワークキャンプ「にじいろ☆キャンプ」実践報告」『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第9号、pp.1-20。用例は pp.18-19 より。
- 15) 増地（2018b）の語彙表では、テレビ番組のジャンルまでは示していない。筆者の手元のデータにて、【ホンモノ】【イマドキ】共にバラエティ番組で使用されていたことを確認した。
- 16) 出典：糟谷修（2018）「マイナンバーの問題点—実務から見た不安」『愛知淑徳大学論集—ビジネス学部・ビジネス研究科篇』第14号、pp.1-21。用例は p.5 より。
- 17) 出典：大宮摂子（2018）「保育内容「環境」におけるプロジェクト活動」『愛知淑徳大学論集—福祉貢献学部篇』第8号、pp.28-43。用例は p.39 より。
- 18) 出典：川上知子（2019）「中学校段階における不登校経験者のその後の進路選択に関する考察」『愛知淑徳大学論集—心理学部篇』第9号、pp.7-14。用例は p.13 より。

【調査に使用した学術雑誌】※愛知淑徳大学リポジトリ掲載順

- ・『愛知淑徳大学論集—文学部篇』第43号（2018）、第44号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集—人間情報学部篇』第8号（2018）、第9号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集—心理学部篇』第8号（2018）、第9号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集—創造表現学部篇』第8号（2018）、第9号（2019）
- ・『愛知淑徳大学 健康医療科学研究』第8号（2018）、第9号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集—福祉貢献学部篇』第8号（2018）、第9号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第9号（2019）

- ・『愛知淑徳大学論集－ビジネス学部・ビジネス研究科篇』第14号（2018）、第15号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第10号（2018）、第11号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集－グローバルコミュニケーション学部篇』第3号（2019）
- ・『愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇』第5号（2015）
- ・『愛知淑徳大学 初年次教育研究年報』第3号（2018）、第4号（2019）

文献

- 朝日新聞社用語幹事編（2010）『朝日新聞の用語の手引』朝日新聞出版
- NHK 放送文化研究所（2011）『NHK 漢字表記辞典』NHK 放送文化研究所
- 柏野和佳子（2014）「「コーパス」でさぐる和語や漢語のカタカナ表記の実態」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』高田智和・横山詔一編、彩流社、pp.86-105
- 柏野和佳子・奥村学（2012）「和語や漢語のカタカナ表記－『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態」『計量国語学』28（4）、pp.153-161
- 共同通信社編著（2010）『記者ハンドブック第12版』共同通信社
- 土屋信一（1977）「現代新聞の片仮名表記」『電子計算機による国語研究Ⅷ 国立国語研究所報告59』国立国語研究所、pp.140-159
- 中山恵利子（1998）「非外来語の片仮名表記」『日本語教育』96、pp.61-72
- 堀尾香代子・則松智子（2005）「若者雑誌におけるカタカナ表記とその慣用化をめぐって」『北九州市立大学文学部紀要』69、pp.35-44
- 増地ひとみ（2018a）「学術雑誌におけるカタカナの役割と使用実態－カタカナ表記で出現する語とコンテクストとの関連」『国文学研究』184、pp.1-15（pp.105-91）
- 増地ひとみ（2018b）『現代日本語におけるカタカナ使用の実態とその背景』早稲田大学、博士論文
- 増地ひとみ（2019）「「非外来語のカタカナ表記」研究の現状と今後の展望」『愛知淑徳大学論集－文学部篇』第44号、pp.143-159
- 増地ひとみ（2020）「大学生の文字生活と文字種意識に関するアンケート調査結果」『日本漢字學會報』2、pp.145-159
- 松村明校園・教育出版編集局編（2011）『表記の手引き 第六版』教育出版

付記

本稿は、愛知淑徳大学の特定課題研究助成「学術的な文章における非外来語のカタカナ表記－実態調査と出現要因の検討」（2019年度）および「「表記の手引き」類に準拠したテキストにおける表記のゆれの実態調査」（2020年度）の成果の一部である。